

下官集

解題

下官集一卷 撰者詳ならず

〔傳本〕 この書、舊新宮城藏本による。其他二三の寫本傳れり。定家卿自筆といへるもの、并に其摸本あるよしなれど未見ること能はず。

〔提要〕 この書も、古き假名遣の書、ことに定家卿の自筆なる由をも傳ふるが故にこゝに収む。更に原本を得て校正せんとを希ふ。

按ずるに、群書一覽卷二、百丁ウに曰はく、

三藐院關白臨定家卿書一帖

寛政中江都井上慶壽藏刻にして、定家卿自筆のかなづかひの卷を、近衛關白信尹公の臨書したまへるもの也。

卷首に、書始草子事、次に嫌文字事あり。又、緒之音を、尾之音れ、え枝へゑ、ひゐい等の字あり。又、假名字かきつゝくる事、書歌事、草子に付色々符の事など記されたり。

卷末に、二條中將爲衛朝臣、實相院准后義運大僧正、逍遙院實隆公等の與書有。

又三藏院奥書に云、此一巻堀尾出雲守所持也、閑覽多幸之餘令書寫畢、信尹按ずるに、行阿のかなづかひの親行の手より出て定家卿合点の書也。此一巻の實に定家卿自筆のかなづかひなるものなるべし。

名物記に見えたる定家卿自筆の假名遣の書も、この本なるべけれど、此際、見る能はずりき。

下官集と群書一覽に見えたるどころとい、やゝ異なる點ありて、書始草子事の前には數行あり。其他のはゞ同じきか。奥書も亦異なり。

所謂假名文字遣の他、かゝる作ありて、當時にかなづかひの説の起りしこと、其假名の如何なりしかをも知る助ともなるべきか。

「色々符」の條、原本點を附けて、音調と清濁とを示したれど、其寫し粗にして用ゐがたし。故に今之を省く。

下官集といふ書名の、本文の中に「下官付此説」、「下官用之」などゝあるによりて傳寫せし人の命じたるもの、即ち下官の定家卿の自稱の語なるべし。原の書名今知るべからざるなり。

下官集一卷

音の

ひくさはすへにをこ

こをを

名を

らは本ノマ、近を

をのかねを

てにをのはの字也

同かよふ言

物いひて

たかひに

うくひす

にはひ

ありとも

ゆへを

人をもよをして

もよをされて

いはひ

わひしく

思ひ

よはひ

給ひ

よひせ

うつろひ

一書始草子事

同ハ自ノ誤

假名物、置右枚、同左枚書始也、舊女房所書置皆如是、先人又用之、清輔朝臣又用之、或自右枚端書之、伊房卿如此、下官付此說、摸漢字之摺本之草子、右一枚白紙徒然、似無其詮之故也

一 嫌文字事

他人總不然、又先達強無此事、只愚意分別之、極僻事也、親疎老少一人無同心之人、尤可道理、況且當世之人所書、文字之狼藉過于古人之所用來、心中恨之

●心 欲ハ私ノ誤カ

緒之音 を 仍欲用之

をみなへし

をとほ山

をくら山

玉のを

をたえのはし

をく露

をのこ

を山田

風のをと

をくる

をんな

人のをこる

をうなトモ云

をろか

をかのへ

てにをはの詞のをの字

尾之音

ね うねのおくやま 書之故也

かく山

おほかた

おもふ

●た

●え

おしむ

おどろく

おきの葉

おのへの松

花をおる

おりふし

おどろへ

おいらく

おなし事

おつる

おこり事

おどこ

おひ

おろそか

おくる

おきゐて

おりたつ

おうぬ

おふる

おみの衣

おはな

え枝 むめかえ 松かえ
ほつえ まつえ

かたえ

ふるえ

たちえ

断たえ

越こえ

笛ふえ

見え

風さえ

聞え

えやはいふき

たえ今入

かえての木

えひす

まぢえ

心え

えあるまじきこと

さかえ

えあるまじきこと

えぬ所

えふ

えたる所

なにはえ

えをまらぬ

花のえ

すみのえ

三島え

もえき

そなえり

万えふ

きえかへり

えたかえに

近代人多ふえどかく古人所詠歌わしまよふを以て可爲證

へ

うへのきぬ

不堪たへす

まろたへ

草木をうへをく裁也

前まへ

とのゆへ

栢かへ

やへさくら

このへのうち

さなへ

おもへ

とへ同答

こたへ

今入
いにしへ

なからへ

いくへさくらん

物へ

ゐ中へ

いへる

かそへ

いへ家

かへりこと

たどへ

そへ

よそへ

なすらへ

●
ゑ

たへなり

おへる

あへぬ

おまへ

いへども

たくへて

あはさへ 人さへけふまへ
諸事同之

うちほへ

たかぞへ

むへく

かよへる

とりかへて

ゆへ

さへつる

こしへ けき

物ならへる

にはへ

をしへ

つたへきく

方へ

おりはへ

さへけき

かのへ

おどろへ

し給へり

くはへて

ひかへ

ききたへ

まかへる

なこしのはらへ

あつすへ

うへにをく

心へ 是をへ
かへ

かへし

ゑ

すゑ

こゑ

こすゑ

繪ゑ

衛士

ゑのこ

つゝ本ノマ、

●ひ

詠あ期い詠

ものゑんし怨也

産穢ふ

今入ゆくゑ

垣下座ゑんのかさ

すゑしと思ふ

ゑふ

つゑ

ひ

おもひ

こひ

あひ見ぬ

かひもなく

いひまらぬ

いさよひ

まひこと

うひと

ねかひ

にはひ今入

あふひ草

いはひ

まどひ

うしなひ

うくひす

いひて

うたかひ

たかひに

うつろひ

よはひ

但此字哥之秀句之時皆通用

あ

藍あゐ

池のゐる

つゐに迷に色にそひて

よゐのま通ひ又常事也

い

おるぬれは 又常事也

くらゐにつかせ給

なきさのゐん

い

くれなる

ゐ中へ

いり日

いくたの松 社記

いへ家

いのり

にし 今入のたい

鏡たい

天かい

どうたい

佛たい

いっこ

いにしへ

いへり

いくへ

いのち

右事非師説、只發自愚意、見舊草子可思之

●ほ

ほ

もしほ

かほる

にほふ

にほどり

こほり

さほつ

いくしほ不重何さかくへきそ

そほふね

そほる

かきは

まらどほ也

か さほつみそほつノ誤

●ふ

まぢかほ

まほるゝ

ふ

^{今入}天あふき さすらふまよふ同意

あふひ草

あふきの風

まかふ

にはふ

かそふる

そふる

さそふ

かよふ

うつろふ

たくふ

つたふ

いろそふる

天をあふき

なからふる

人をどふ

^{今入}一神なひみ

うかめる涙

^そなすらへ

かなふむ

あはれひみ

さやく

いつく

すさふむ

えらひみ

一假名字かまつゝくる事

としのうちにい るはきに けりひ

とせをこ そとやい はむとし

如此書時よみときかたし句を書きる大切よみやすきゆへなり

此處傍字ニ脱オホシ

此處書樣脫ス

縱令如此書

一書詞事

知物様々人稱故實、態以上句之末下句行之上ニ書

さくらちるこのまた風の さむから

てそらにまられぬ雪をふりける

往ハ徒ノ誤カ

如此書事難有其説、當時至愚之往、迷而不辨上下句、只付讀安可用左説

さくらちるこのまた風のさむからて

そらにまられぬゆきをふりける

眞名を書交字或ハ落字之時上句一行にたらずなれども只如闕字其所置て次の

行に可書下句之由綴之

一草子付色々符事不重之本ノマ、和漢有假令

古今和詠集卷第二

如此之所也

左枚書始、其事時多付件枚、清輔朝臣如此付、者人左枚雖書之付書右枚、下官用

之、以右手引披依有便也

此文誤脱アリ讀ミト
キ雖シ十五頁ヲ參照
シテ讀ムベシ

已上先人下官存之、他人不同心

此草子靈山法師御房筆也、見或人之下付符之一事無之書歌多様有之、被書送人之時自然有廣略之不同歟、仍今左移之、其時

弘安七年七月九日

本ノマ、
信昌記之

一書哥事

本ノマ、
同哥可披講斷之書一首之時三行三字

なにはつに さくや この

はな ふゆこもり いまは

はるへど さくや こ

のはな 師説如此

書二首之時無定様今案也

詠遠尋山花和詠

官名

一書始草子事

無ノ字、原本之ヲ脱ス

于ノ字原本、テニ誤ル

假名物多置右枚、自左枚書始之、舊女房所書置皆如此、先人又用之、清輔朝臣又用之、或自右枚端書之、伊房卿如此、下官付此説、摸漢字之摺本之草子、右一枚白紙徒然、似「無」其詮之故也

如狹衣物語、女自左枚書流例歟

一 嫌文字事

他人搃不然、又先達強「無」此事、只愚意分別之、極僻事也、親疎老少一人無同心之人、最所謂道理、況且當世之人所書、文字之狼藉過于古人之所用來、心中恨之

緒之音 を 仍私用之

をみしなへし

をとほ山

をくら山

玉のを

をさゝ

をたえのはし

をくつゆ

てにをはの詞のをの字

尾之音

ね うぬのおくやま 書之故也

おく山

おほかた

おもふ

おしむ

おどろく

おきのは

おのへの松

花をおる

かりふし

え枝 梅かえ 松かえ たちえ ね

笛ふえ 断たえ

越こえ きこえ

風さえて かえての木

近代人多ふえとかく

古人所詠あしまよふねを以て可爲證

へ

うへのきぬ 不堪 たへず 通用常事

草木をうへをく裁也

まへうしろ ことのゆへ

やへさくら けふこゝのへに

どへ同答 こたへて かもへは

ゑ

すゑ ゆくゑ

こすゑ 繪 衛士

消きえ

見え

えやりのふきの

まろたへ

栢かへ

さなへ

こゑ

ゑのこ

詠 朗詠

産 穢

垣下座 ゑんか

ものゑんし 怨也

ひ

おもひ

かひもなく

こひ

おひ見ぬ

まひくと

いひまらぬ

おひぬれば 又おいぬれば

うひこと

いさよひの月 但此字哥秀句之時皆通用

ぬ

藍あゑ

つゐに 遂に色にそいてぬへき

池のいる

よゐのま

ら

にしりたい

天かい

右此事ハ非師説、只發自愚意、見舊草子可思之

一假名字書つよくる事

どしのう ちにい るはきにけりひ

とせをこ　そとやい　はむとし

如此書時よみどきかたし句をかきたる大切よみやすきゆへ也

としのうちにはるいきにけりひとせを

こそとやいはんとしとやいはん

縦令如此書

一書哥事

知物様々人稱故實、態以上句之末下句之行之上に書

さくらちるこのえた風のさむからて

そらにえられぬ雪を降ける

如此書雖有其説、至愚之性迷而不辨上下句、只付讀安可用左歟

さくらちる木の下風のさむからて

そらにえられぬ雪をふりける

一草子付色々シラシ符事シラシ和漢有之、假令

古今和歌集卷第二　如此之所也

右枚書始、其事時多付件枚、清輔朝臣如此付、先人左枚雖書之付不書右枚、下

此處ノ書様本ノマ、

官用之、以右手引披依有便也

已上先人下官存之、他人不同心

表紙裏書云

此事此廿餘年以來也人殊有存旨歟悉被書改大略皆之と書てへと悉を被弄歟と見ほとにふえ跡たへ件々此字出來

齋藤女房達の月次の之見む又時不具之ありなりと

すなほにして

そへうた

かそへうた

た、こどうた

なすらへうた

それまくら

ねてわかすらん人さへそらさ

春哥上

袖ひちて

花とや見らん

かりければ

どよひのゝもり

もゝちどり

道行ふりに

誰しかも

人の心に

わかれやのせぬ

花見かてらに

まてといふに

春下

以下詞の左ニ點ヲ附
ケタレモ今ハブク原
本粗ニシテ撰トシガ
タキ故ナリ

五月雨の下そらノニ
字脱ス

いささくら我もちりなむひとさかり

とならば
みわ山をまかまくすか

いさけふのくれないなけの
こまなめて

おもふとち

夏 哥

時鳥ななく里
やよやまで

五月雨のもとゝるによたゝなくらん

昔へや

秋 歌 上

このまよりもりくる月
うつりどり

かすさへ見ゆる秋の夜の月

いなおほせどり
いとはやも鳴ぬる鷹か

秋萩にうらひれをれば山したとよみ

枝もたはこなゝにちるらんをのゝつゆまもに

冬 哥

こころふらなんノ誤

冬こもりける

離別哥

すかるなく

あさなけに

人やりの道

かさくらしとはならん

霧旅哥

かりくらししたなはたつめに

物名

うくひすどのみ

あなうめに

をかたまの木

我のけさうひにそ見つる

二條の後春宮のみやすん所と申ける時に

めどにけつり花をさせりける

いさゝめに

心はせ

春霞なかしかよひち

涙河おさひん時や

戀哥一

わやめも玄らぬ

ひをりの日

雲のはたてに

ゆたのたゆたに

むめのほつえはっ

あはゆきのたまればかてに

戀哥三

よるへなみ

世をうみへたに

戀哥四

ひさのゝつゝらすゑつゐに

思ひかもはずとひかたみ

戀哥五

雲もなくなきたるあさの

なにふかめて

人名 きたののはる

まきのはねかきもはかき

こめやどの思物から

今まのどわひにし物を

なとか涙のいとなかるらん

哀傷哥

まつく花の色

色もかも昔のこさに

雑哥上

玉たれのこかめやいつら

さらぬわかれも

もどくたちゆく

などか我身をせめきけん

雑哥下

浪のさはさに風そまぐめる

世の中のうけくにあきぬ

はしに我身なりぬへら也

雑躰哥

短哥

えふの身なれば

やよければ

のはへまし

旋頭哥

花まひなしに

誹諧哥

まめなりさとなにそいよけく

まめなれさなにそいよけくノ誤

そへにとて

第二十

ねてのあさけのえものふりりも

こよろきのめさし

けくれなくよこほりふせる

文永三年四月下旬新大納言以御自筆本書寫之同點了努々不可他見

一校了

元徳元年十月上旬之比於京都三條殿御所寫了

珍 範